

ヒトと動物をめぐる「種」の再考

～関係の学からマルチスピーシーズ人類学へ～

文化人類学分野では「種 speciesの再考」が盛んに議論されつつある。とくにこの20年ほどのあいだで、人類学は文化表象をめぐる議論から、「動植物」「モノ」などを含む自然と人間が絡まりあって生みだされた世界をめぐる学問へと、その研究の方向を大きく転換させてきた。人類学はいま、人間中心主義を超え出たところから「ヒト」について新たな存在意義と適応への問いをいざなう学問への生長の途上にある。その中心的な議論のひとつとして、異種間の創発的な出会いを主題とした「マルチスピーシーズ人類学」の可能性に注目した。

本研究会集会では、種間<<ヒト・どうぶつ・植物>>の横断的な絡まりあいを主題とした近年の調査研究を発表し、「種」相互の持続性や未来への新たな適応を見据えた学際的な討議を実施する。

【共催】マルチスピーシーズ人類学研究会（以下幹事）

石倉敏明（秋田公立美術大学）

大村敬一（大阪大学）

奥野克巳（立教阪大学）

大石高典（東京外国語大学）

シンジルト（熊本大学）

近藤祉秋（北海道大学）

相馬拓也（早稲田大学）

第1部：文献レビュー

※各文献は参加者各自でご入手ください

■ 12:00～13:30

(1) ファシリテータ **吉田真理子**（オーストラリア国立大学 博士課程）

Tsing, A. (2009) 'Unruly Edges: Mushrooms as Companion Species', *Environmental Humanities* vol. 1: 141-54.

(2) ファシリテータ **相馬拓也**（早稲田大学 高等研究所 助教）

Kelly, A. H. & Lezaun, J. (2014) 'Urban mosquitoes, situational publics, and the pursuit of interspecies separation in Dar es Salaam', *American Ethnologist* 41 (2): 368-383.

(3) ファシリテータ **近藤祉秋**（北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 助教）

Hugo Reinert (2016) 'About a Stone: Some Notes on Geologic Conviviality', *Environmental Humanities* vol. 8: 95-117.



【開催日時】

2016年10月2日（日）

12:00～18:30

早稲田大学
9号館5階
第一会議室

第II部：研究発表



■ 13:45~15:00

「猪」観を考える： 獣害問題の現場から

安田 章人（九州大学 基幹教育院 准教授）

【発表概要】 猪は、古くから人間の生活圏に近い場所に生きる大型哺乳類である。近年、猪による農業被害や人的被害が、いわゆる獣害問題として問題視されている。そのなかで、猪は人間に危害を与える危険生物として認識されている一方で、ウロボウ（猪のゴドモ）をキャラクター化したり、愛玩する事例もみられる。こうした人間の猪に対する多面的な見方は、狩猟者や農業者にも確認することができる。しかし、獣害問題の現場において猪と対峙する人びとと、都市部に住みメディアを通してしか猪との関係をもたない人びとの間には、同じ種間関係であっても異質性があるように思われる。本報告では、現場性に着目し、人と猪の関係をひもとくことを試みる。



■ 15:10~16:15

人間の先祖、ハワイ島マウナケア山： 聖地の開発問題をマルチスピーシーズ人類学から考察する

軽部 紀子（早稲田大学大学院 博士後期課程）

【発表概要】 アメリカ・ハワイ州ハワイ島では、現在、ハワイ先住民文化にとって最も神聖なる場所のひとつである、マウナケア山の山頂における新たな天文台施設の建設をめぐって大きな社会問題が起きている。地球外生命体及び第二の地球の発見という人類にとって重要な課題を携えた国際的プロジェクトに対し、ハワイ先住民を中心とする反対派は、「マウナケア山は私たちの家族だから」という主張を以って大きな壁に立ち向かう。本発表では、ハワイ先住民文化の根底にある、人・動物・植物・自然現象・環境・先祖・神々といった広い枠組みでの複数種間の複雑に絡まり合う関係を考察し、「科学vs先住民文化」という言説によって曇りガラスの向こう側へと置かれてしまう反対派の主張に、透明度の高い解釈を提示したい。



■ 16:25~17:40

伴侶であり食材である： 中国の「犬肉祭」で問われる人畜境界

シンジルト（熊本大学 文学部 教授）

【発表概要】 最古の家畜、犬の扱いはデリケートである。この問題で、国際的に注目されているのが中国の犬肉祭（狗肉節）である。夏至前日、玉林市で開かれる犬肉祭で一万匹以上の犬が殺され食される。その是非を巡り、動物愛護団体・行政機関・食肉業者・地域住民の間で激しい論争が繰り広げられている。今優勢を占めつつある愛犬派にとって、犬肉食はカニバリズムであり、食犬派はもはや同じ「人間」とみなせないのである。「伴侶であり食材である」という人民日報の記事は、両派の対話を促すものである。両派の主張の違いを超えて共通にみられるのは、犬と人間の「種」の境界の流動化である。この流動化の様相をマルチスピーシーズ民族誌的に描き出すのが、本報告である。



「マルチスピーシーズ人類学第4回研究会」は12月頃を予定しています。詳しくは以下の本研究会URLをご参照ください。
<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/katsumiokuno/multi-species-workshop.html>

【お問い合わせ】

奥野克巳: katsumiokuno@rikkyo.ac.jp

相馬拓也: takuyasoma326@aoni.waseda.jp